

書評

Mary Poovey, *Genres of the Credit Economy: Mediating Value in Eighteenth- and Nineteenth- Century Britain*
(The University of Chicago Press, 2008)

宮崎 かすみ

とてつもない本だということを、まず言うておかねばなるまい。近代小説の誕生を目前にし、「信用経済」なるものが産声を上げた17世紀後半、空想的書きもの、貨幣、そして経済に関する書きものは、すべて信用経済の価値を媒介するという同じ機能を担っており、同一のジャンルに属していたという、驚くべき知見から本書は始まる。そしてこれらの「書きもの」が、しだいに経済的、空想的、貨幣的ジャンルへと枝分かれしてゆく瞬間をとらえ、さらにそれらが専門分化して（貨幣は書きものとしての性格を喪失）、経済学・文学が学問分野として確立される19世紀後半までの過程を、本書は豊富な事例を駆使して詳細に辿る。ジャンルの分岐と確立を扱うこの本は、それでは一体何のジャンルに入れればいいのか。経済史、文学史は言うに及ばず、金融史、精神史、観念史そして文学批評のジャンルにもまたがる、壮大な知的絵巻物の観を呈する（それゆえ本書がカバーするジャンルはとうてい評者の手に余ることを断っておく）が、これら様々な学問領域にまたがる歴史としてすべて、本書の動機づけとなる究極の問いに奉仕しているにすぎない。「文学研究は何のためにあるのか」。しかるに、この問いに対する答えに本書の価値があるのではない。そこに至る歴史を紐解くプロセス自体が、目も眩むような歴史叙述であり、人文科学における一つの新しい知の様式フーコーの言説批判に取って代わる の提案なのである。

「文学研究は何のためにあるのか」、換言すると、文学研究の価値とは何ぞや。ここで著者は、「機能」という観点からこのディシプリンが社会において担った役割を理解しようとする。こうして明らかとなった文学の歴史的機能

の一つは、価値を媒介することだった。とはいえ考察の対象となる17世紀末には、これはまだ文学とすら言えず、「空想的書きもの」として括られるものの一部にすぎなかった。この文学の先祖は、新しく勃興した市場経済と、これが支えた価値の市場モデルを人々に理解させるのを促したという意味で、価値を媒介したのである。これと並んで同じ役割を果たしていたのが、市場や信用、価格についての情報を提供する経済的書きものと、そして貨幣だった。これらは1770年頃までは別個のものともみなされてはならず、価値を媒介するもののヴァリエーションにすぎなかった。文学の起源とみなされるものと、貨幣および経済学の始祖との結びつきという発見だけでもこの上なく刺激的なのだが、本書の目的はここにあるのではない。むしろ、これらが渾然一体となっていた17世紀末から、それぞれが独立して専門的なディシプリンへと分化・発展してゆく過程の詳述が真骨頂なのだ。これは未だかつて誰にも書かれたことのなかった歴史である。

以下で本書の概略を、評者なりに単純化して紹介する。著者は、「表象の問題系」を切り口として、先の三つを連続体とみなしていた認識の歴史に分け入る。そこにおいては、貨幣（特に紙幣）とは、合意や信用によって価値が象徴された書きものなのであり、経済的書きものと空想的書きものはともに価値を媒介する「言語」（=象徴）として、貨幣と等価にみなされていた。言うまでもなく、「表象の問題系」とは、記号が、記号の指し示す意味や価値の根拠を正しく表象せずに、遅延や曖昧さなどのズレがある事態のことである。近代資本主義の黎明期において貨幣制度が確立するために、象徴や表象の機能こそが最も枢要であったことは容易に想像できる。硬貨のように等価な貴金属に裏打ちされているわけでもない、ただの紙切れの上に書かれた文字の価値を信じるというのは、表象がまっとうに機能しており、それゆえに「表象の問題系」が消滅して初めて可能なことだった。

しかるに、「表象の問題系」が可視化されるのは、表象や記号に価値をもたらす根拠に対する信用がなくなる時である。イギリスの歴史上では、1720年の南海泡沫事件を機に起こった株価暴落による信用不安、1797年イングランド銀行券の金への兌換停止措置が取られた時期等がこれにあたる。三つのジャンルが分離し始めたのは、まさにこの事態への対応からだった。ここを起点としてそれぞれが専門分化し、後に経済学および文学として確立し、専門

家集団が生まれて近代社会の枠組みが形成されるに至ったというのである。南海泡沫事件時、株価の大暴落によって人々が大きな損失を被ったことを契機に、貨幣とそれが表象する価値の等価関係が崩れた。そこから貨幣的装置（株券や手形等を含む）の中にも、「正当な金」と「正当でない金」という区別がもたらされる。「正当でない金」を見分けて排除することができるようになると、貨幣の表象性がうまく機能し始める。こうして貨幣、とりわけ紙幣が本質的には「虚構」であり、書きものであるという事実が忘れ去られていった。これは、貨幣が「同化」(naturalization) したからである。このようにして貨幣は本来、価値を表象していたにすぎなかったのに、価値そのものとみなされるに至る。ここで重要なのは、「正当な金」と「正当でない金」という二分法が、「事実」と「虚構」の切り離しをもたらしたことである。

経済的書きものと空想的書きものとの分離は、それまで未分化だった事実 (fact) と虚構 (fiction) の連続体から、それぞれが差異化され独立していくことを契機とした。経済的書きものは、自然哲学が創り出した「事実」という概念を援用して、自分たちも「事実」を生み出すために経済学（ポリティカル・エコノミー）という制度を整えた。これが制度として成立すると、この分野では「事実」と「情報」を旨とする叙述が確立されていく一方、「虚構」と思われる要素を排除していった。19世紀末までには、経済学はさらに数学的な理論を採用した抽象的な経済理論を頂点として、下は日常的かつ物質的な経済記事へと至るサブジャンルの序列化ができあがっていた。他方、空想的書きものの書き手たちは、「事実」には基づかないものの、「嘘」でもないという「虚構」の世界を新しく創り出した。彼らは「表象の問題系」に対処するにあたって、むしろこの問題系を活用した。表象という行為につきまとう曖昧さや多義性などのマイナス面を逆手に取って、そこからむしろ言語の力を最大限に引き出そうとする「虚構」という安全地帯を画定したのである。

ここまでは、三つのジャンルの分化・独立が始まる迄の段階であり、本書全体の分量からすると序章にすぎない。以下、序論では信用経済の成立期に機能していた価値の媒介物の中でも、初期の貨幣に焦点が当てられる。手形や初期の銀行券、小切手など、貨幣的機能を有していた文書の原初的形態が写真も添えて詳述されると、貨幣の原点が「書きもの」だったという著者の主張も説得力を増す。一章では、17~8世紀における「貨幣についての書きもの」と「貨幣として機能した書きもの」との錯綜した関係が語られる。「貨幣として機能した書き物」の流通が増大してこれが安定すると「貨幣についての書きもの」はあまり生産されなくなる。これが増えるのは「表象の問題系」が顕在化したときである。こうした書きものが約一世紀後に掘り起こされて編纂され、経済学の先駆的業績として権威づけられることになる。他方、「正当でない金」を差異化して排除しようという意識が芽生え、それが「空想的書きもの」に及ぶと「事実」と「虚構」の分離が始まった。これより前の近代初頭では、直近の事件や出来事をおもしろおかしく伝えるニュース・パラッドと呼ばれる俗謡が多く発行されたが、ここでは「実際に起こったこと」と空想的なレトリックを区別する精神は認められない。この種の空想的書きものの中には、ニュースともノベルとも呼ばれたニューズブックや実在する人物のゴシップ話的なシークレット・ヒストリー、占星術的な占いを盛り込んだ暦などがあった。一旦、「事実」と「虚構」が分離を始めるや、経済的書きものは情報と理論を専らとして編制されてゆき、個人の利益の追求から社会全体の利益を追求することへと議論が抽象化される。他方、空想的書きものの分野では、実在するものと架空のものとが混在していた空間から、架空の登場人物のみに絞られた純粋な「虚構」空間が成立した。

2章では、それぞれのジャンルのさらなる進歩が語られるが、特筆すべきは、初期小説の成立で論じられるデフォー作品の分析である。マルクスは近代的市民の先駆として社会科学の観点から『ロビンソン・クルーソー』を論じたが、プーヴィーの議論もマルクスの向こうを張っている。かつて経済学が論じ、今や文学研究がその議論の枠組を替えようとするのだ。著者のこの志は多としたい。3章では、紙幣の貨幣価値が定着して、虚構性が完全に同化していった過程を、ウィリアム・コベットのラディカルな貨幣批判、ロバート・オーウェンの労働兌換券の試みと挫折などを通して辿る。4章は、経済学が経済理論に特化しつつ学問分野として権威を獲得していった過程を、リカード、ミル、ジェヴォンズなどの著作から跡付ける。

5章では、高度に専門的な文学研究が成立するに至る要因を、市場価値とは独立した文学的価値の確立、解釈と批評的読解の発達、小説における文学的価値の側面から明らかにする。経済学が市場経済における価値の概念を洗練させてゆくにつれ、これと袂を分かった文学は、有用性などといった経済的

価値とは別の価値を打ち立てなくてはならなくなった。そこで、空想的書きものを消耗品と芸術作品とに分離し、芸術としての文学には審美性という価値を付与した。ここで読む技術として解釈や批評が発達し始めるが、まさに解釈こそ文学が、「表象の問題系」の孕む可能性から、この技能を見出し発達させ、学問としての文学を権威づけるために利用したものなのだ。6章との間に、インターチャプターが設けられ、フーコーの言説批判という方法から発達した「歴史主義批評」を俎上に載せて文学が歴史を取り込むことの限界を指摘する。キャサリン・ギャラガーによるマルティノー、*Illustrations of Political Economy* についての議論を取り上げ、これが現在の我々のジャンルや思考の枠組みからの批判であるため、マルティノーの同時代人がそのテキストをどう読解しどう利用したのかが理解できていないと批判する。つまり著者は、フーコーの「言説」分析に代わるものとして、分類とジャンルの観点による歴史的批評を本書で提唱するのである。

これを受けて6章では、彼女の提唱するジャンルの確立という観点による読解が、オースティン *Pride and Prejudice*、ディケンズ *Little Dorrit*、エリオット *Silas Marner*、トロロープ *The Last Chronicle of Barset* に適用される。これらの分析は、従来にないジャンルという観点からなされているのだから、大変刺激的である。だがこの手法が、フーコーの言説分析に代わるものになりうるかという点に関しては、読者のみならず、著者自身も懐疑的であるらしい。過去の歴史を完全に再現することなどできない以上、現代の我々が利用しうる数少ない観点から過去の歴史を紐解くことは、多かれ少なかれ、現代人による歴史の「奪取」(appropriation)となることを免れない。著者はギャラガーらの読解をそう批判しつつも、自らの研究もその弊を免れていないことを認めているようだ。なぜなら6章のタイトルを自ら、*Literary Appropriations* と名付けているのだから。

しかしこの批判は、本書が成し遂げた達成の総体に対して何らの影響を与えるものではない。本書の価値は、文学研究の再興に資するといった、そんなケチな動機にあるのではない。現代の私たちが完璧に忘却していた認識の地下鉱脈を、ブーヴィーは見事に探り当て発掘した。この発掘の作業を読むこと以上に刺激的な読書体験など、めったにあるものではない。